



第62号  
平成30年8月  
発行 NPO法人小野川を  
と佐原の町並み保存会  
佐原町並み交流館  
お問い合わせ  
佐原町並み交流館  
電話 0478(52)1000

### 伊能忠敬翁・没後二百年記念式典

#### シーボルト家や間宮家の子孫を招いて

「伊能忠敬翁没後二百年記念シンポジウム」(伊能忠敬翁没後二百年記念事業実行委員会、香取市、同教育委員会主催)の第一部が五月二十日(日)佐原文化会館で開かれました。

前半の講演で北海道大学客員教授佐々木利和氏は、シーボルトはスパイではなく「日本がいかに素晴らしい国であるか」を世界に紹介するに伊能図が必要だったのだと「シーボルトの押収品から見えてくるもの」を話されました。

#### 特別寄稿

### 伊能忠敬翁没後二百年の記念行事を終えて

#### 菅井ふみ子・ウオルファルト

去る五月二十日に行われた伊能忠敬翁没後二百年記念の一連の行事はドイツよりシーボルトのご子孫(孫の孫)コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン・ツェッペリン氏をお客様に迎え和やかに行なわれました。

この行事に先立つこと三年前、ドイツ・ローテンブルク市に住む私のところへ、香取市役所から手伝ってほしいというお話があったのは二〇一五年五月初めの事でした。その内容はお客様のご招待及び資料借用に関わるドイツにおけるパイ役です。ことは実家近



佐原駅南口で行なわれた伊能忠敬翁銅像除幕式

く伊能忠敬翁没後二百年記念の一連の行事はドイツよりシーボルトのご子孫(孫の孫)コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン・ツェッペリン氏をお客様に迎え和やかに行なわれました。

「シーボルト」の著書である「NIPPON」の中に込められた日本への深い愛情を菅井ふみ子さんの通訳で語りました。伊能忠敬の遺品を整理しているシーボルト事件に連坐した者の罪名を記した幕府内々のお知らせ状「封廻状(ふうかいじょう)」がくしゃくしゃになって出て来たこと、間宮林蔵の子孫が旭川に残っている等の逸話も紹介されました。



中央が菅井ふみ子さん、右がブランデンシュタイン氏

いう軍人と結婚し、そのご子息がツェッペリン伯爵の一人娘と結婚しました。結婚の際、ツェッペリンの名が無くなるのを惜しんだドイツ皇帝がブランデンシュタイン・ツェッペリンというダブルネームをお許しになった。そのツェッペリン家からブランデンシュタイン家の大叔母さんの所へ跡継ぎとして入られたのがコンスタンティンさんというわけです。

更に驚いたのは、このドイツ人のお客様が、実は伊能忠敬を知らなかったということ。シーボルト事件で門外不出の極秘扱いとされた日本地図の作者忠敬さんにシーボルトは会っていません。シーボルト家に代々引き継がれた遺品史料に名前が出てこない人物に対し、ブランデンシュタイン氏が興味を持たなかったのは自然なこと。シーボルト自身、地図の作者にまで思いをめぐらせていたか?一方、多くの日本のシーボルト研究者との交流から、ご子孫は「Nobun」の存在はご存知でした。でもそれが伊能図かご存じなかったし、作成した人物及びその仕事内容もご存知でなかった。

シーボルト家の史料には最上徳内や間宮林蔵の記述はあるようですが、彼らが忠敬さんの弟子であったことを彼は今回の催しではじめて認識したようです。また、その後の日本と世界に与えた影響を考えた時、シーボルトの日本地図出版は高く評価されますが、その元図がこの佐原出の人物が達成した偉業であったという「発見」を今回されたわけです。

北大客員教授佐々木先生のシンポジウム基調講演を聞いて、シーボルト事件で没収された伊能図の写し等が明治以降に長崎から東京へ移され、江戸城の火災で焼けることなく、今も東京国立博物館に所蔵されていることが分かった時の安堵の表情は、歴史上の謎解きが一つ叶ったという、そんな感覚でしょうか。

いずれにしても、そのような「発見」に貢献できたことが私にとっては楽しく、ひいては香取市の評価にも役立つたかと思うと嬉しいです。ただご子孫としてはシーボルトがスパイであったと言ふ説は許しがたく「スパイではなかった」とシンポジウムで断言されました。私達は不用意にスパイという言葉を使っていたかな、その子孫が現在いらっしゃることに思いが至らなかった。

最後に、この貴重で楽しい体験をもたらしてくださった香取市にお礼を申し上げたいと思います。また、宇井市長を頂点にこのプロジェクトに関わり膨大な仕事量をこなされた市の職員の皆様にも感謝とお礼を申し上げて、この記念行事に関わる仕事を終えたいと思います。

(行数調整のための変更があります)



# DVDを見て「昔かたりの会」懐かしい町並みを堪能して

香取市役所都市整備課の住宅・町なみ班の声かけで、平成三十年三月二十七日(火)の午後一時三十分より、町並み交流館の二階で「昔かたりの会」が行なわれました。佐原の中心に住まいの約十五名の皆様にお集りいただきました。

佐原のかつての生活状況、路地裏の風景を撮影した貴重な静止画写真群を見ながら、昔話を聞かせていただいた会でした。沢山の写真は、昭和四十九年に佐原の町並み調査が行なわれた際に、佐原市の中心地を千葉大学の大河直躬先生が撮影されて

いたもの。香取街道沿いと小野川沿いの家々が軒並み撮影されていて、その一貫性は貴重な記録といえます。



なごやかな懐旧談に花が咲く

## 佐倉高校生がヨーロッパで佐原を紹介

千葉県立佐倉高校は、平成28年～32年までの5年間、「スーパーグローバル・ハイスクール(SGH)」の指定を受けて、国際化をすすめる諸団体と連携して、生徒の国際的素養を身につけ、コミュニケーション能力・問題解決能力の養成を進めてきました。

昨年の12月に生徒と指導教官が、佐原町並み交流館を訪問して、高谷館長から佐原の町並みの歴史について講義を受けました。

佐倉市は江戸時代には老中を輩出するような有力な藩であり、現在も古い建造物や遺蹟が残されています。佐原は幕末には、天狗党の来襲があって大変な被害があり、佐倉藩に編入してもらうという関係もあり、密接な関係がありました。その関係から佐原の江戸・明治について研究する必要があったのでしょうか。

平成30年3月には、佐原の研修に参加した1,2年生が英国とドイツでその成果を発表してきました。その発表内容は「佐原の大祭を通して観光をいかに進めるか」というテーマで「佐原の大祭」の歴史の説明から始まり、「香取市がいかに努力して観光を推進しているか」そして「香取神宮や醸造所の紹介」から「佐原への交通を含めて、佐原での一日の過ごし方」までを英語で発表したのです。

プレゼンテーションは、佐倉高校生による佐原研修の成果発表といった形となりました。

今回の「会」の目的は、伝建地区をもう少し拡大するための基礎資料となる写真を見てもらう会でした。小野川の柵がない頃で、一軒一軒の家々も木造建築ばかりが目立ちます。参加者は、五十年ほど前の町内写真に懐かしさをこめて「昔かたりの会」を楽しんでいました。

交流館では、一日中、昭和七年以降の「山車祭」の16ミリDVDを公開上映していますがその中には様々な市民の貴重な風俗や家並みが残されており、その映像からは佐原の様々の角度からの歴史が読み取れる「佐原の昔かたり」には貴重な動画です。今後もこの会が佐原住民の保存意識の拡大と底上げに貢献できると期待されています。

## 東京から佐原へ、町並みガイドに奮闘する

### 石毛 隆さんの紹介

東京から佐原まで、月に数回通いながら、町並み案内ボランティアをしている石毛隆さんを紹介します。



観光客に佐原を説明する石毛さん

してお客様のご要望を聞きながら臨機応変にご案内をしています。

また、秋には県内の小学四年生が課外活動で佐原にやってきました。時々想定外の質問が出るので苦労しますが、ご両親と共に再度佐原に来てくれるのは有難いことです。

（観光客が喜んでくれる所は？）

奇跡的に残っている古い町並み、電柱が地中化された小野川両岸、正上のからくり戸、福新呉服店の中庭や古い旅館の風情、山車会館の実物の豪華な幣台等です。

伝建地区の建物をご案内していたとき「この建物はどこから移築してきたのですか」といわれて驚いたことがあります。

（ガイドをやつて良かったこと）

全国各地の方々を知り合えるのが一番です。また、一年に二回は高校の同級生を案内することがあります。旧友に会えて本当に懐かしい思いで一杯になります。

また、保存運動の全国大会に参加して沢山の町の良さを知ることが出来ました。

（今後の抱負は？）

佐原には、外国からのお客様が増えてきていますので、タイや中国や韓国等の人々と簡単な挨拶を原語で話せるようにしたいです。

（ガイドの心構えは？）  
ボランティア申込書を読んでお客様の背景を調べさせていただきます。



伊能忠敬お墓参りと中川船番所資料館の見学

平成三十年三月十五日(木)、「考える会」の研修会旅行で上野にある源空寺と中川船番所資料館を見学しました。参加者は三十二人で、八時二十分に香取市役所をバスが出発。順調に上野に到着し、浅草の西方の源空寺へ。まず寺脇の道路を隔てた墓所にお参りをしました。

入ってすぐに高橋景保、高橋至時の墓石があり、その先に伊能忠敬の立派な角石の墓石があります。櫛の枝を供えて全員で線香を手向け、しばらく墓前で談笑し、谷文晁や幡随院長兵衛などの有名な人物の墓がある墓



浅草・源空寺の忠敬墓碑に花束を捧げる

内を見て回りました。その後、本堂前に移動して参拝し庭園を散策。昼食は、浅草の葵丸進にて天麩羅コースをいただきました。食後約一時間、浅草寺周辺を散策する自由行動。



旧中川に面して建つ中川船番所資料館

十三時四十分バスに乗りし中川船番所資料館に向いました。資料館は、広々とした運河を前にした立派な江東区の建物で一階が中川番所の展示室で、正面に再現ジオラマが江戸情緒を

醸していました。学芸員の説明によると、ここは、中川と小名木川と船堀川とが交差する地で、江戸と関東を結ぶ重要な場所でした。寛文元年(一六六一)に小名木川の隅田川口にあった幕府の「深川口人改之御番所」が移転されてきたもので、川を通行する船を見張っていました。佐原を出た沢山の荷物がここで改められていたことでしょう。

二階は江東区の歴史の展示室で戦中戦後の区内の懐かしい写真が沢山あり、三階はかつての漁村を象徴する釣り道具の展示室です。約一時間の見学後、バスは順調に佐原へ帰着しました。

ただのり 伊能忠誨と祖父忠敬 (その3)

岐路に立つ伊能忠誨

文化15年は4月22日に改元され、文政元年となった。今から200年前のこの年は数え年で13歳の三治郎(忠誨)にとっては過酷な一年となってしまった。江戸では、4月13日に祖父の忠敬が死去。佐原では、6月13日に母のリテが死去。11月25日には弟の鉄之助が死去。5年前に父の景敬を亡くしているので、伯母の妙薫(忠敬の長女イネの出家名)の庇護のもとで、江戸亀島町の地図御用所での暮らしを続けることになった。

忠敬が亡くなって間もない5月上旬から天文方で「暦学稽古」を始め、文政3年には天文方筆頭の高橋景保から星座の作成を命じられ、本格的に天体観測に取り組み始めた。また、15歳になったことから、三治郎という幼名から、幕府の学問と教育を担う林大学頭に願って、忠誨を実名とし、伊能家の当主の通称である三郎右衛門を名乗ることになり、文政4年3月27日に元服した。同年7月10日には、高橋景保に伴われて、完成した「大日本沿海輿地全図」を江戸城の大広間で広げて、老中や若年寄に披露し、ここに忠敬の測量御用は完結した。そこでようやく忠敬の病死届けを「忠敬の孫」「佐原村の長(おさ)百姓伊能三郎右衛門」という名前で提出した。

成長した忠誨は、「忠敬の孫」として江戸で天文暦学の道を進むのか、父親景敬の跡を継いで、「佐原村の長百姓」伊能家の当主として生きていくのかという選択を迫られていた。伯母妙薫の思い、高橋景保の期待、佐原村の伊能家一族の考え、領主の旗本津田家の立場が交錯する中での選択である。人生の岐路に立って、忠誨の気持ちは揺れ動いていた。忠誨は「祖父の跡を継ぐべきか、または父の跡を継ぐべきか、心が定まらない。先祖の前で籤(くじ)を引いたところ、佐原に住み父の跡を継ぐという籤が出た」と日記に書いている。

文政4年の暮れには、幕府から天文方高橋景保の「手附手伝」を命じられたが、翌年夏の伯母妙薫の死を期に、佐原への帰村を決断した。

(玉造 功)

「考える会」の主な事業

第一日曜日・骨董市。月一回案内班会議。

二月十三日(火) 理事会

二月十五日(木) 第九回佐原の町並み保存を知る会

三月十六日(金) 第十回佐原の町並み保存を知る会

三月十七日(土) 十八日(日) 千葉県観光ボランティア協議会(銚子市)

四月 五日(木) 文化庁視察来館

四月二四日(火) 理事会

五月十六日(水) 小野川清掃(川ざらい)

五月二十日(日) 伊能忠敬翁没後二百年記念、地図製作体験学習

五月二四日(木) 「考える会」第十四期総会

五月二四日(木) 六月二四日(日) あやめ祭「シャトルバス」町並み案内

町並み交流館の行事

三月二六日(月) 五月二四日(日) 「忠敬翁没後二百年記念」展示

四月十四日(土) 五月十三日(日) 伝「徳川秀忠公着用甲冑」特別展示

五月十五日(月) 六月三日(日) 櫛の道切り絵サークル作品展

六月二日 十七日の土日、小野川両岸歩行者天国

六月五日(火) 十日(日) 日本盆栽協会佐原支部盆栽展

六月二日(木) 七月二日(土) 佐原の光景写真展

七月二九日(日) 香取市国際交流協会「身近にお茶を楽しむ会」

八月四日(土) 二六日(日) 北澤聖江・佐原・大祭・母と子と絵画展



町並みを歩いて(その十七)

重伝建地区の隠れた魅力を発掘

佐原の近代建築遺産の

修復と再現

三菱銀行佐原支店旧本館の建物は、平成二十三年(2011)の東日本大震災による影響が大きく、以後はずっと閉鎖されてきました。いよいよ今年六月よ



待望の修復工事の準備に入る三菱館

三菱銀行佐原支店旧本館の建物は、平成二十三年(2011)の東日本大震災による影響が大きく、以後はずっと閉鎖されてきました。いよいよ今年六月よ



忠敬橋際に完成する千葉商船本社屋

観光案内に感謝の礼状 (その20)

交流館の奥のコーナーには机、椅子、そして半紙と筆が用意されていて、いつでも座ってゆっくりと佐原へ来た感想を書いていただくことができます。「さわらはとてもきれいです。まつりはよかったです。うれしいです(ベルギー)」、「佐原でのすてきな時間ありがとう(セルビア)」や「安静的城市、彷彿時間凝結(台湾)」や「佐原の街並みは、来る度に表情を変え、新しい一面を見せて、訪れる人々を飽きさせない、また来ようかしら?と思わせてしまう、素敵な街です。」などのコメントを残したり、絵の得意な方はプロ顔負けの筆致で作品を残してくれています。筆字で書かれた国名は数十ヶ国にわたり、文字通り世界中の方が佐原を訪れています。



佐原の思い出を残してくれる来館者たち

水満之助商店により行なわれました。

現在、内部は非公開ですが、建設当時の面影を完全に再現すべく修復が行なわれるものと予想されています。

また、忠敬橋の際にある千葉商船本社ビルも、現在建築中であり、今年度末にも竣工する模様です。この新しい建物も、佐原の近代の繁栄を支えた面影を再現するような建物になると思われます。東京新橋にある堀商店ビルが参考にされています。

堀商店は鏡前・建具金物メーカーで、ビルは角地に建てられています。設計者は国会議事堂設計チームの中心であった小林正紹(まさつぐ)氏で昭和七年築の昭和初期を代表する商業建築で登録有形文化財指定です。

伊能隊・第九次測量の旅

伊豆七島へ風まかせ、漂流を克服し事業完遂

忠敬は、延べ四年に及ぶ九州測量の旅以来、健康の衰えを見せていたので、忠敬の長女である稲(妙薫)や天文方筆頭高橋景保も、下役や内弟子に任せるように論じたのである。

隊長は永井要助にかわる

第九次は伊豆半島から大島、三宅島、八丈島など伊豆七島に渡海するという難関であった。文化十年に坂部貞兵衛が病死以後、支隊長として

雲霧が深く苦勞した。五月八日に下田に到着したが、十日間は風待ちをしなければならなかった。

御用船「観音丸」で船出

十九日に下田港を御用船「観音丸」で出帆し三宅島へ向った。二十二日には八丈島へ渡り全島を測量。水田のない苦しい島民の生活、流罪者の様子も見た。約半月の風待ち後、船出はしたが風がなくなり黒潮に流さ



朱線は、往路を示す 青線は、復路を示す

忠敬を助けた永井要助(景保手付下役)が隊長。坂部八百次(貞兵衛の子)、門谷清次郎(景保手付下役)、箱田良助(忠敬内弟子。文政五年頃榎本氏に入婿、武揚の父)、保木敬藏(忠敬内弟子)と筆取り、幸領、従僕四人の総勢十一名。文化十二年(1815)四月二七日(陽曆六月四日)に江戸を出立した。東海道を下り三島から測量をしながら南下。韮山で江川太郎左衛門に会う。天城峠越えは繁茂する樹木、

れ三日間漂流する。やっと七月三日に三浦半島の三崎に上陸。一週間後の七月十一日に再度三宅島に渡り、周辺の小島群を測量。さらに北方の大島へ渡ろうとするが下田の近く須崎に着いてしまう。十月二十一日にやっと大島に着き、測量後下田に戻る。熱海では初島測量も行ない、伊豆半島を北上。関東西部を巡り熊谷まで北上して江戸へ上る。帰着は文化十三年(1816)四月十二日。の延べ三三九日であった。